

利潤と人民の生活との対抗関係

阿 部 矢 二

I 独占資本と自由

II 人民の生活と人民の権利

I 独占資本と自由

封建制の社会が崩壊したあとをうけてきた資本主義の社会は、その実質的な土台となった資本制生産様式に照応した上部構造として、デモクラシーの政治、経済の諸制度とイデオロギー諸形態とをもっているのが一般的定型である。この社会では、すべての人が封建の身分制から解放され、誰も特権をもたず、したがって、自由な平等な、権利義務をもつ人格として認められるようになった。憲法やその他の法律が、いわゆる基本的人権や人民の参政権について、それを各条文に明記することによって保証している。かくして、資本制生産に適應した近代市民社会の態様がととのえられたことになったのである。封建的諸拘束、ことに世襲的身分の上下による主従関係から個人を自由にした点において、資本主義社会は歴史を著しく前方へ推進した。しかしながら資本主義的自由は、一定の発展段階における歴史的現実が生みだしたものであるから、その具体的内容はやはり歴史によって与えられたもの・資本の利益に奉仕するもの・以外ではありえないのが当然である。そこに資本主義社会における

自由の進歩的役割の歴史的意義・歴史的制約がある。

資本主義的自由は、資本主義そのものが独占資本の段階にふみこむとともに、その歴史的使命をおえた形骸だけのものになってしまった。形骸だけの自由がひきつづいてなお独占資本に愛用されるのは、この言葉の内容がその反対物・独裁に転化しても、その言葉の響だけはやはり人民のあくがれを伝統しているからである。独占資本は人の耳に快よく響く言葉だけの自由を反対の目的に逆用する。すなわち自由の名によって、人民に錯覚をおこさせ、人民を欺瞞し弾圧してブルジョア独裁を維持している。反動化した権力はあらゆる時代おくれになったものを復活させて反動支配のために利用するが、なお、本質上進歩的なものさえも反動の手にかかると逆転して反動的役割を演じさせられる。自由はその一例にすぎない。

ブルジョアの自由の歴史的、具体的意義をはっきり理解するためにも、また、この自由を人民の福祉を一層すすめるための有効な条件として生かすためにも、根本的に必要なことは、吾々が働く人民の側に立って考え、日常生活の実践を通じて自由の発展的諸条件を学びとるということである。自由を進歩の軌道のうえにもどして前進させうるものは働く人民のみである。

資本主義社会は本来、一般勤労人民の資本にたいする隷属と、隷属を通じて収取される不払労働の上に成立している社会だからどんな場合にでも、勤労人民をこの隷属から解放して自由にするわけにはいかない。それで人類の自由・平等として抽象化されたところの自由・平等の資本主義的な、具体的な内容は、資本が勤労人民を隷属させるために必要とする限られた範囲での自由・平等であり、勤労人民の側には多くの場合、その反対物——強制・不平等——として現れる。生産・生活手段から自由にされた勤労人民は、餓死に強制されて労働力を売る

ことを余儀なくされる。自由な労働は賃銀制度のもとでは奴隷労働に転化する。「彼等の独立という仮象は、個人的賃雇主のたえざる変動と、契約という法的擬制とによって維持されるのである。」^①

商品化された労働力の価値は、一般商品の価値法則に規定されて、一日の労働によって消耗された体力を補うに過ぎない金額に固定される。それで労働者の生活は、その生涯にわたって、一日働いて一日食えるという手から口へのその日暮しの状態以外のもではありえないことになる。このように労働者を無一文の状態て永久に維持することが、資本蓄積の・資本制生産様式の・不可欠の条件である。それゆえ、資本主義の社会機構は労働者階級を、階級としてもれなく飢餓の脅威にさらすことによって資本に隷属させ、強制労働に服させる。だから、この社会では法制によって何人にも労働を強制する必要は全くない。資本主義的な労働の自由とは、労働を人民に義務づけたり強制したりする法律の条文がない、というだけのことである。「法律による労働の強制はあまりに多くの骨おりや暴力や物議を伴うが、飢餓は、平和で静かて絶えまない圧迫であるばかりでなく、勤勉および労働の最も自然的な動機として、力いっばいの努力を生ぜしめる。」^②

資本による労働の搾取は労働力の売買を通じ、平和で静かな経済的方法でおこなわれ、労働者階級の資本にたいする隷属も、資本制生産様式そのものが生みだすところの貧困の蓄積と飢餓の圧迫によるものであり、そこには目に見える経済外的な暴力は介在しない。しかしながら、人間による人間の搾取、一方の階級による他方の階級の労働のタグ取りは、究局において一方の階級の暴力による他方の階級の制圧がなければ、維持することが不可能である。それで、経済的条件をもってする搾取・隷属関係に照応する政治的・法制的支配関係が、資本による労働者階級の搾取と隷属を最後に決定的に保証している。

労働者階級はその階級の本能によって、賃銀労働のうちに敵対的なものを臭ぎつけ、階級としての誕生と同時に資本にたいしその搾取に反抗する闘争をはじめた。賃銀制度のもとにおける労働者は、闘争することによってのみおれも人間だ、という誇りを維持できるような、そんな非人間的な、みじめな、反抗せずにはいられないような生活におかれたからである。長時間労働、低賃銀、失業の不安、はプロレタリアを「人間として考えられるかぎりの、もっとも腹だたしい、もっとも非人間的な状態」においこんだ。この状態に対処する方法は、労働者にとって二つしかない。「つまり、自分の運命に服従して、*「よい労働者」*となり、ブルジョアの利益を、*「誠実に」*まもるか——そのときには彼は動物化することはたしかである——、それとも反抗して、自分の人間性をまもるためだけだったかうかである。そして、この後者のほうはブルジョアジーとの闘争のうちでのみなしうることである。」⁽⁴⁾

これは今から百余年前、イギリスの労働者階級の状態をつぶさに観察し調査してえたところのエンゲルスの報告の総括である。当時のイギリスのプロレタリアートは、世界で最も進んでいたとはいえ、まだ科学的社会主義の理論を知っていたわけではなかった。だからその闘争も偶発的であり、多分に自然発生的な性質の抵抗であったにちがいない。しかし、プロレタリアートは闘争のための理論的武器の有無にかかわらず、斗争せざるをえない義憤に燃えて闘ったのであり、闘いを通じて自分の人間性をまもることによって、人類を究局の墮落から救ったのである。資本主義は国際的に同じ経済的土台に立っているから、どこでも、プロレタリアートは同じような社会的生活条件のもとにおかれる。そして、社会生活における同じような物質的条件からは同じような社会的意識が発生する、それだから、日本においても斗争が労働者を、最もおくれた封建的農村出身の無組織労働者を、

いっぺんに人間にしたからといって驚くにはあたらない。

「藁納屋に何年と寝ていた父の顔、笑ったことのない皺くちャの小作人の兄の顔——虎公は三男だった。北越の雪にとざされた白い飯を食ったことのない農民の子だった。こらえることを堪え忍ぶことを、生れ落ちるから刷らされて来ていたのだ」この貧農出の労働者は資本家と斗いテロにあうと、たちどころに、働くものの体のうちに眠っていた人間性を呼びさまされた。「自分の腹の底に、たたかればなおかたくなり、押えつけられればより強くなるあるものが、あの暴力団に拷問されたときから、ひよこりと生れたのだ。いや、あの拷問によって、自分で気付かずにいたものを掘り出されたのだ。……では、あるものとは何だ？

それは……そうだ「労働者の正義」だ！ そいつが俺を頑張らせた。腕を捻じられれば「畜生」と思い、咽喉をしめられれば「覚えてろ」と思う。そしてそのあるものは自分達仲間は、皆持つてんだ。長い何千年という押えつけられて来た俺達貧乏人は皆持つてゐる」^④

プロレタリアートがブルジョアジーの前に敵対階級として現れ、斗争をはじめるとやいなや、ブルジョアの自由と民主主義はその人民的意義を維持することの困難に当面する。階級闘争が資本の切実な利益を脅かすほどに強力になり激烈になるにしたがつて、国家権力が労働者の隷従を強制するために、直接勤労者の身体の上に赤裸々な力として加えられるようになる。人民が人間にふさわし生活をさせろと要求し、その人間性を護って立ちあがる丁度その時に、自由にして独立の人格を保証するとうたわれた基本的人権が無にされる。資本との対決においては、人民は人間らしく納得すくの解決を与えられることは殆ど望めない、資本は動物を強制すると同じやり方で、つまり、力で、人民を強制する。人民の自由と権利とは、それが人民にとって最も役立つべき瞬間に

消え失せてしまう。人民にとっての自由は、動物としてではなく、人間として生きるための権利をまもるに必要
な条件としての自由である筈なのに。

資本にとっての自由は、独占資本の段階では、独占資本の独裁―人民の側からの如何なる拘束からも自由な独裁―以外のものではない。独占資本は最大限の利潤を獲得するためには、どんな手段でもとる自由をもたねばならない。独占資本が最大限の利潤を獲得する方法は、搾取の強化、戦争、掠奪であり、その結果人民はいよいよ窮乏化し、墮落し、人間性を喪失するだけである。この人類的惨害からまぬかれて、豊かて明るく平和に暮らそうとねがう人民側からの一切の要求と行動は、拒まれたり強圧されたりする。人民は生活・生命をまもるために、なんの自由も権利ももたないのである。独占資本の性格についてのスターリンの規定によっても、このことは明瞭に諒解される。

「現代資本主義の基本的経済法則の主要特徴と要求は、だいたいつぎのように入えるだろう。すなわち、その国の大多数の住民を搾取し、零落させ、貧困にし、次に他の国々、とくに後進国諸民族を隷属させ系統的に掠奪し、さいごに最高の利潤をあげるため戦争と国民経済の軍事化という方法によって最大限の資本家的利潤を保証することである。」^⑥

〔註〕

1、長谷部文雄訳「資本論」青木書店版・第一部下・八九六頁

2、同・書

九九九頁

3、エンゲルス「イギリスにおける労働者階級の状態」マルクス・エンゲルス選集・補巻2・一八四頁

4、徳永直著「戦列への道」

八八―九一頁

かつてストライキをやったことなかった、農村に直結した、決して進んだ方ではない、紡績業の婦人労働者が一九五一年末にはじめて紡績資本あいての闘争に立ちあがった。その闘争の経験は、彼女らに人間を自覚させ、人間として生きるよるこびを与えた。

「N紡績工場の女性たちは、工場生活をふりかえって『賃上げ要求でたたかたときが一番のしかつたと思います』といっている。実際、彼女たちが工場生活の中で最も印象深くはればれと思ひ出されるのは、やはり日ごろの圧迫に反抗し、生活を改善するために抵抗したことである。中でも低賃金に抗らい、低生活水準をひき上げるためのたたかいはもっとも印象的なはずである。」〔「女子労働者」岩波新書・二一七頁・）

5、スターリン・日ソ親善協会誌、「ソ同盟における社会主義の経済的諸問題」

五三頁

Ⅱ 人民の生活と人民の権利

明治維新を一つの劃期として、日本は封建社会から資本主義への転換をはじめた。そのために、資本制生産様式に対応する政治、法制的体制も整備されなければならなかった。それで徳川幕藩の封建専制にかわる明治憲法が制定され、人民のために参政の道もひらかれ、国の主権は徳川將軍の手から天皇へうつされた。日本資本主義成立の歴史的な特殊事情は、絶対主義の止揚によるブルジョア・デモクラシーの確立という世史的過程を踏襲することを許さず、逆にブルジョア・デモクラシーは天皇制絶対主義の確立を粉飾し援護する名目的・ついたて的・役割を演ずるだけの必要の限度において実現されたにすぎない。日本資本主義は、プロレタリアート、農民に直接対応する面においては、徳川幕藩の封建的専制支配階級の暴力と全く異るところのない天皇制絶対主義の

野蠻な暴力をまるだしにしたのである。憲法やその他の法令による人民の自由や基本的人権の保証は、それが最も必要とされる場合・人民の生活をまもる闘争の場合に無効にされた。明治以来現在にいたるまでストライキや農民闘争が、かつて警察や軍隊の暴力の干渉、強圧なしに闘われたことがあるか、また、日本の勤労者階級が、かつて「人たるに値する」生活をしたことがあるか。否かつてなかった。この事実こそ、日本人民は、支配者・搾取者にとっては徳川治世以来の相変らずの、踏みつけるままの、「民草」であり、搾取の対象・生きた道具であつて、かつて人間として認められたことがなかったのだという現実の証拠である。

人間はその日の食うことにも、こと欠くような窮乏の状態におかれると、その日が食えさいすればそれであるので、食うこと以外はすべて顧みられなくなる。一切が食うためである。考えないで食うというのは、人間的というより動物的な生活である。人民の大多数をそのような生活状態において、その日暮して、明日の生活の不安にさらしておいて、憲法の条文で

「国民は、すべての基本的人権の享有を妨げられない。この憲法が国民に保障する基本的人権は、侵すことのできない永久の権利として、現在および将来の国民に与えられる。」（第十一条）といったところで、人民は果して基本的人権を有効に行使できようか。腹の空いている人民には選挙権がいくらに買われるかが問題で、選出される代表の所属改竄などはおよそ、その関心にはいつてくる餘地はない。政治資金の最も豊富な政党が最多数の票を買いつめて政権を掌握するということは、天皇制の絶対専制とブルジョアジーの最大限の利潤の搾取との、利得の一致をみる苟合点であり、ブルジョアジーは、天皇制絶対主義の権力をかりて人民を無権利、無抵抗の状態に圧下し、この状態のもとで人民の貧困と無知とを永久に維持することによって、最大限の利潤を資本に確保

してきたのである。だから、戦後憲法が掲げた「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。」(第二十五条)の条文などは、現に食えないような国民生活の状態に照して、明々白々の嘘偽なのである。凡そ、あらゆる権利は、それを裏づけ生かすところの経済的条件なしには、全くの空文句である。

国民の権利や自由は、憲法や法律の条文に明記されただけでは、国民の、日常生活の上に実現されるものではない。事實は逆である。その国の人民の権利が、自由が、どの程度に認められているかを正直に示すものは、国民生活の実状が「人たるに値する生活」であるか、ないか、である。日本の労働基準法が「労働条件は、労働者が人たるに値する生活を営むための必要を充たすべきものでなければならぬ。」(第一条)と規定しようが、しまいが、現実の労働者・勤労者一般の生活はこの規定からは独立している。一九五一年一〇月号「前衛」によると、日本における都市の失業・半失業者数九〇〇万、農村のそれも九〇〇万である。日本人口をざっと八千万人にみつもりとすると、二割強が平均の、人民なみの最低生活さえしていない訳である。日本政府の発表した「二八年度・経済白書」によると、被救恤的窮民―これは現実に救恤を必要とする人民数のうちから種々な条件をつけて救恤から除外した形式的な、救恤該当者をできるだけ少くするような算定法による被救恤数であるが、それにもかかわらず―が国民総数にたいして四〇人に一人の割合になっている。国民の窮乏は独占資本収奪の限界にまで迫っている。したがってその危機がここに見られる。

「昭和二七年において国民約四〇人に一人が保護を受けており、その金額は被保護世帯一世帯当月平均約五千円になり、当該世帯実収人の約五割に当たっている。」^①

それはともかく日本勤労者階級の日常生活の状態は、その前時期―徳川専制期にくらべて質的な向上を示した

だろうか。幕藩政權は、あからさまに百姓を「生かさず死なさず」の生活に釘付けして「おごり増長」させないように、政治するのが百姓への慈悲だと宣言した。極度の搾取⇨慈悲の結果・百姓は生涯米が食えないだけではない、その末路は一家離散、のたれ死であった。すなわち、「貸借段々に重り、後には如何にも可仕様無之少分の田畑を少しつづ売渡し、杖柱と頼申候子弟を四方に売り散らし夫婦兩人に罷成り、五六十の老衰に及ぶ迄隆寒大暑の嫌なく働き申候て少しの休息不罷成遂には夫婦別離して人の奴婢となり、愁え悲み一生を終り申様に罷成候。」^④というのが徳川末期の貧農の生涯の定型であった。ところで、その後百年あまり、昭和四、五年の農民生活はどうであったろうか。「自分の飯米にする分まで売り飛ばすという段階から更に一段と進んだ者は、娘を売るか、青田を売る。彼等は、青田のうちからその収穫物をもう人手に渡してしまふのだ。今年黒田を売った者があつたそうだがと新潟でたづねると、黒田どろるか白田も売った、という返答だつた。田の上に雪のあるうちから売つたのだ。青田売りや黒田売りは、山形、秋田、宮城、福島などにもあるし、また鳥取、島根方面にもある。」^⑤いづれにしても、農民の生活の窮乏には大差はないではないか。徳川専制下の隷農・百姓も、天皇制絶対主義下の個人として自由に解放されと称される農民も、いずれの場合も、借金の結果田畑、収穫、娘を売っている。売れるものを売りつくしたあとは、一家離散、ルンペン化である。国民の過半乃至は半数に近い人口を占める働く農民の窮乏・非人間的低生活は、必然に工場労働者の賃銀を規定する有力な条件となる。明治以降の日本資本主義の異状に急速な発展は、主として徳川専制下の隷農の貧困無知、無権利、搾取条件をほとんどそのまま、明治以来の天皇制絶対主義政權がうけついでたという事情によるところが大きいのである。

資本の利潤は勤労者の窮乏に比例して増大する。だから、人民の一層の窮乏化は資本の本質的要求である。資

本のこの要求は、直接には労働賃銀の圧下についての強烈な欲望となつて現れる。資本は絶えず賃銀を無費用—零—にまで引下げようとする、そうすることによって利潤を最大限に増加させようとする動向を内蔵している。この点で資本制生産様式は根本的に、反人民的である。

「彼等の無費用」ということは、数学的意味での極限であり、たえず近づきうるが決して到達されえないものである。彼等をかかふる虚無的立場に圧下することは資本の不断の傾向である。」^④

現実において、資本家はしばしば賃銀不払によって、それを支払ってもタダのように安い労働力の価値を、完全にゼロにしてもうことさえ珍しくはない。信州の製糸業者の多くのものは昭和初年の恐慌に際しては、女工に工賃を払わないで絹糸をアメリカへ輸出したのである。それでも、住みこみの年季契約による女工は飯を食へさせてもらうだけで、一日十二時間労働の搾取を、がまん、というより満足していたのである。それほど貧農の生活はひどかったのであり、彼等は三度の飯が食えないで、文字通り餓えていたのである。新潟の貧農出の製糸女工は語る。

「でも、わたし食物のことは一度だつて辛いと思つたことがあります。これまで私達がうちでたべている物にくらべれば、まだしもここの食物のほうがずっと良いんです。形ばかりですけれども、とにかく一日に一度か二日に一度かはお菜のなかにお魚のきれがはいりますし、一週間に一度は肉のものはあります。うちで生のお魚を買うなどということはいつたい一年に何度あるでしょう。一年に一度もない年だつて珍しくありません。

それより何より嬉しいのは、三度三度なに不自由なく食べられるという事です。ほんとうにそれだけでもうなにより有難いという気がします。」^⑤

三度の食事が与えられる、それだけなにより有難いというほど、もとの農村での生活は苦しかったのである。それだからこそ益暮半期払いの約束の賃銀の支払いを半期々とのばされて、あげくのはては不払いにされても、彼女らはただ「不自由なく」食へさせてもらったというだけで、諦めるのである。低賃銀の一般的土台となっている農民の労働生活は「土」の作者は次のように描きだした。

「彼等は労働から来る空腹を意識する時は一寸も動くことの出来ない程俄に疲労を感じることをさえある。どんな粗末な物でも彼等の口には問題ではない。彼等は味うのではなくて要するに咽喉の孔を埋めるのである。冷水を注いでそのぼろぼろな麦飯をかき込む時彼等の一人でも咀嚼するものはない。彼等は只多量に嚙下することによってその精力を恢復し満足するのである。」

牛や馬でも地上に軟かな草の繁茂する季節が来れば自然に乾草や藁を厭うようになる。それが貧しい生活の人のみはかうして甘んじて居ることを餘儀なくされつつあるのである。^⑤

勤労者のこのような、牛や馬よりも、みじめな状態と、そこから生れる資本の繁栄とを資本家は公然と肯定している。「今日まで我国の諸工業のおこった主たる理由は労働賃金が廉かったことである。これ我工業における殆んど唯一の強味であったことは争うべくもない。もとより態率において劣る点があるが、それを見ても我国の労働賃金の安かったことは事実である。」^⑥

賃銀労働者の賃金水準を低位に押し下げている原因の主なもの一つは、「過剰労働と過少消費」を原則とするところの一般農民の非文化的低生活水準である。自作農と称する小所有者的農業労働者が自ら満足して、自身に受取る賃銀は、一般に農業賃労働者に支払われる賃銀よりも低いのが通例である。それは西欧でも日本でもか

わりない。「農民を鞭って無所有の賃銀労働者以上に自らを虚使せしめている所有は、彼を駆って、彼の生存の要求をばなお賃金労働者の要求水準以下の最低限にも縮少せしめる。」一八九七年英国における農業調査報も、この事実を認めている。「小農民にとって自らを主張する唯一の道は、二人の日雇人の如く働いて、一人の日雇人以上には支出しないということである。」^⑧日本農民の堅中どころ、独立の健全な農業経営を維持できるとされている標準型自作農の場合でさえ、戦後においてもその生活水準は雇傭農以上ではないのである。「東北型農村の典型として、山形県大泉村は水田単作・調査農家の七割以上が一町歩以上の大きい耕地を経営している。この農家の大人一人当り年収は、昭和二十三年税務署の更正決定によれば、二、三万乃至四万円である。この年収に対して、常雇の年賃銀は食事付三万円だという。それは大経営の場合でも『労働の生産性が常雇の労賃を辛うじて賄う程度』であることを示すものである。」^⑨

このような「片足をつねに被救恤的窮乏の淵に差し入れている」農民が、資本主義の機構そのものによって絶えず湧き出し、絶えず増大する相対的過剰人口となって、農村に溢充している。彼らは食えさいすればというだけの条件で、どんな仕事にでもつかみかかろうとして待機している。九〇〇万とも推定される「からっぽの胃の腑」——失業・半失業農民——それが、勤労者一般の賃銀を低水準におさえ、彼らの生活を貧農の生活水準へ絶えずひきつけるよう作用しているのである。

小農民にとって貧乏と過労は切りはなせない因果関係で結びついている。

食事と睡眠の時間——それさえもしばしば満足にはとれないが——を除くすべての時間が労働時間であるような生活は、あらゆる自由を失った奴隷の生活とそうかわりはない。このような生活には文化のはいりこむ余地が

ほとんどないから、そこでは無知を因習と迷信がはびこるだけで、階級的政治意識など目ざめることはむずかしい。だから、すべての時間を呑みつくすほどの過剰労働は、結局、その人々を隷属、貧乏の状態に縛りつけてしまうことになる。

何時からか日本農村では「五月田植は泣く児がほしや、畦に腰かけ乳のましよ」というような唄がうたい伝えられてきたが、実際は唄よりもひどく、嫁の授乳時間は切りつめられ乳児はやせるといふ事実が、徳島県那賀郡の農家の進歩的な一主婦によって語られる。

「二分でも三分でも授乳を早く切り上げて仕事をしなければならぬ。だから農家の乳児は、特に農繁期にはどこの子供もみなやせる。可愛いわが子にせめて授乳の時間位ゆっくりしたいし、毎日の新聞にも目を通したさ。」^⑩

アメリカ資本主義は電化された家庭の「アメリカ的生活様式」を誇示するが、それはアメリカでも決して勤労人民一般の生活スタイルではない。アメリカでも資本は農業地方を文化の圏外に遠ざけておくことによって、小農民に過労させ読書させないことによって、利潤を吸いあげているのだ。だから、アメリカの農民も、徳島県の農婦と同様に、自由な時間をもたないのである。こんな点にいわゆる自由な諸国は共通な利害関係をもっている。

「一九二一年、一人の家事使用人を雇っている農場は十六農場のうち一つしかなく、さらに二人の家事使用人を雇っている農場は六十の農場のうち一つしかないと推定されている。また、北部中央部およびロッキー山地の諸州においては、日雇であれ週雇であれ、いかなる種類の家事使用人も雇われていない。さように家庭内で助けられないからして、母親はその日その日の仕事を終ると疲れきってしまって、有効に読書したり友人や子供たち

と話しあったりすることができないことになる。農業者はまた労働者を雇って助けとすることは少ない。だから、冬季以外は、日々の仕事に疲れてしまつて、新聞よりむずかしいものを読むことはできない。^⑩」

労働時間が全生活時間だとすれば「農場生活」は決して豊かで、快適なものではありえない。「醜悪」であるよりほかなくて、農民は悲しいことには、それに「満足している」ようにさえ見えるのである。

「農場生活に関するすべての欠陥のなかでの最大の欠陥の一つは、たしかにそれが醜悪なことにある。クロールズアップされて目にうつってくるものなかで、いやな気を起させないものはほとんどない。しかももっと悪いことには、農業者はこの見苦しいことに此上もなく満足しているのである。農場の様子や農業者個人の服装について美しさということがすぐ尊重されるようになる見込みはないように思われる。このことはアメリカ全体として妥当する。^⑪」

農民の生活を引きあげ、文化人として彼らを開明することの出来なかつたことをもつて、アメリカ農業の「無条件的失敗」だとこの著者は書いているが、資本にたいして、勤労者のためにそうした人情的配慮を期待することが、むしろ、問題にされるべきであろう。

「アメリカ農業は、より高いことがら、すなわち文化的な面においては失敗してきた。しかも、ほとんど無条件的に失敗してきたのである。^⑫」

農村ばかりではない、どこであろうとも、資本は貧困をつくりだすことによつて人民を隷属させ支配する。

「アメリカの全世界の七三％の所得は、ヘラー委員会が算出した半飢餓的な最低生活費（一九五一年一月で約四、三三〇ドル）を著しく下廻っている。^⑬」にも拘らず人民大衆は生きている。しかも、人間性を失わずに。人間の生

活はどのようにしても切り上げられる、人間ほど雑食ができ、どんなえさ、でも飼える動物はない、といわれる。食種の多様化は文化の産物だが、多様化を品質の粗悪化の線へ赴かせたのは、社会における階級支配である。支配階級は勤労者階級のつくりだした文化を独占し、勤労者階級へは文化をその反対物・野蠻として与えることよって階級支配を強化する。農村と農民を永久に文化から閉めだし、野蠻蒙昧の状態におき、都会と対立させ、農民を都市プロレタリアに敵対させ、労農統一戦線を分裂させることは、資本主義社会における支配階級の共通の政策である。

働く人民に文化をもたせないこと、彼らに人間らしい生活を拒否すること、彼らを貧困と無知に、したがって政治的無権利の状態に事実上維持すること、これよって資本は人民を隷属させ搾取しているのである。

このような社会機構のもとにあっても、働く人民は決して自らのうちの人間性を失って動物化するものではない、動物的に墮落する傾向にたいして絶えず闘っている。闘って人間性を維持するばかりでなく、それをより、完全なものに鍛いあげつつある。この生産様式にふくまれている敵対性は、矛盾は、直接的生産者を強健な人間に、闘いの勝利者に、鍛いあげることよって解決されるのである。

一九五三・八・三〇・

〔註〕

- 1、経済審議庁編「昭和二十八年度経済白書」 二三六頁
- 2、土屋喬雄著「近世日本経済史論」 一五八頁

- 3、猪俣津南雄著「窮乏の農村」 五三頁
- 4、前出「資本論」第一部下 九三二頁
- 5、タカクラ・テル著「百姓のうた」名作選・二二―二三頁
- 6、長塚節著「土」改造社版(一) 一五九頁
- 7、武藤山治「紡績業」現代産業叢書第二卷 六一頁
- 8、カール、カウツキ著「農業問題」上卷・岩波文庫版・一八九頁
- 9、同書 一九二頁
- 10、「労働問題研究」・昭・二五・四月号・近藤康男「日本における失業問題の特質」
- 11、昭・二八・五・二七期刊「朝日新聞」//農村婦人は訴える”
- 12―14、N・S・B・グラーヌ著「アメリカ農業史」二四四―二五一頁
- 15、「三橋・本岡訳」
- 15、レオンチエフ・ルビンシュタイン「現代帝国主義論」下卷・四一〇頁